
腐官能小説『優しい歌が歌えない-愛と世界と真実と-』

日野 愛歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

腐官能小説『優しい歌が歌えない - 愛と世界と真実と - 』

【Nコード】

N5815F

【作者名】

日野 愛歌

【あらすじ】

ふう……。肺が黒い煙で満たされる。全身を醜男に犯されるような感覚。ゾクゾクする。「兄貴。あにい。お兄ちゃん。瀬咲真実。」ポツリとつぶやく。あにいには私の兄貴だ。あにいには頼りなくておっちょこちょいで、ばかでトロでまぬけでお人よしで。でも、優しくてあったかい、私の自慢のお兄ちゃんだ。お兄ちゃんはすぐくかっこいい。彼には好感がもてる。でも、あいつは馬鹿だから気付かない。あの人には悟られちゃいけない。私のこないけない気持ちなんて。絶対に。「ほんと素直じゃないんだから。」ふいに耳元で誰

かの声が聴こえた。

(前書き)

* (X指定ほどではないですが)性的な描写(とグロ描写)が若干含まれますので、R15指定にさせていただきます。

テーマは『歪^{こひ}だけど、まっすぐな兄弟愛』 『等身大の思春期の女の子の快樂』

コンセプトは【純愛とエロとグロの融合】だよ。

> 狂った感じで同じ言葉を繰り返すのを多用するのはやめといたほうがいいかも。 狂気を表現するのなら他にもなんとでも文章で出来るし。

了解したよ たしかにそうだね。

アスペルガーの特徴のひとつである『反響言語^{エコー言語}』を表現してみたくてね

- - -
- - -
- - -

腐官能小説『優しい歌が歌えない・愛と世界と真実と』
作：日野 愛歌

「くはま……」

私は煙草の煙をくゆらせる。

天気は快晴。時刻は午前11時11分。3時間目の授業の途中。場所は私の通う学び舎の裏。

このジメジメとした歪な空間とカビ臭い匂いが壊れたマリオネットにはひどく心地良い。

私だけの聖少女領域。ニンギョウがニンギョウらしく生きていける場所。

ま、要するにサボタージユ。

私の名前は瀬咲せせ 優愛ゆうあい。私立 九尾鶴こぐわ高校の一年生。15才のちつこい女の子。

自分でいうのも何だけど、顔のつくりは良い方だと思う。胸がちっさいのがたまに傷。

あ、スタイルは悪くないの。アイアムア・スリムシェイプ。ただつるぺたなだけ。 自意識過剰とかゆるーな！。

「こらああ！女子高生が煙草吸っていいと思ってんのかああ」

やば・見られた。誰？ 先公？風紀？ どうする？逃げる？いや、間に合わない。消すか？

「ハハハ。俺だよ、優愛。ただの形態模写だ。」「なんだ、あにか。おどかさないでよ。」

このアホ面ぶらさげてるスポーツ刈りの男は、瀬咲 真実まこと うちの高校の三年生。17才の筋肉バカ。

私の兄貴だ。バスケットでキャプテンをしていて後輩からの信頼も厚い。悔しいことにけっこうモテるらしい、ホモに。

なぜ！？ 神様はいつだって不公平だ。

体つきはガツチリしていて胸板が厚い。身長は186cm。いいな、身長。私も・・・
そうか。こいつに身長と胸囲をとられたのか、私は。むう、赦せん。
おっぱい返せ。

「そつちがやましいことしてるからだろ。」重低音の歌声がよく響く兄。

「別にやましくないよ、だって他の子だって。みんな吸ってるもん。」
優しい歌が歌えない私。

「俺は優愛のいい匂いが好きなんだ。だからもう煙草は吸うな。」
「変態。」
「バツサリ斬り捨てる。」
刹那の見切り。

「……………」

気まずい沈黙。羊たちの宴。1秒・2秒・3秒……

やば…………怒らせちゃったか？ ならここは物分りの良いふりをして…………

「ん、りょーかい。ま、善処するよん。次の授業は国語だからちゃんと出るし。」

「文学少女め。」
「【歩く大図書館】といたまへ。」
「ネタが偏ってるのは仕様だ。」

「早く行きなよ。あにいだって授業中でしょ？今、受験で大事な時期なんだから」

「素直じゃねえなあ」「ほら、はやく」 とりあえず急かす。

頭をぼりぼり掻きながら兄貴は困ったような、呆れたような笑みを浮かべる。

そして、10秒。私の心臓を俯瞰し、青い空を煽り、再び視線を水平に私へと戻す。大きなため息をつき、3セットそれを繰り返す。はやくしろ。時間がもつたいたい。やがて、お節介なバスケツトマンは名残惜しそうに、トボトボと日常へと回帰する。待つて。私をおいていかないで？

「……」 1オクターブだけ《世界》に黙禱を捧げる。

兄貴がいなくなったのを確認してから、裸のお姫さまは再び 非行少女の防護服を着る。完全無欠の着脱自在。

私はスカートのポケットから、おもむろにジッポを取り出し煙草に火をつける。

銘柄はセーラムピアノニッシモ。名前が好きなんだよね、味はスカスカだけだ。

ふと、左手首にギョルリと巻きついた時計に視点を合わせる。

次の授業まであと13分と20秒・か。余裕で2本、いや3本は吸えるな。

ふう……。肺が黒い煙で満たされる。全身の穴という穴を醜男ぶいおとこに犯されているかような感覚。ゾクゾクする。

「兄貴。あにい。お兄ちゃん。瀬咲 真実。」ポツリと雨音がつぶやく。

あにいには私の兄貴だ。あにいには頼りなくておつちよこちよいで、ばかでトロでまぬけでお人よしで。

でも、優しくてあったかい、私の自慢のお兄ちゃんだ。お兄ちゃんはすごくかっこいい。彼には好感がもてる。

でも、あいつは馬鹿だから気付かない。あの人には悟られちゃいけない。私のこないけない気持ちなんて。絶対に。

「ほんと素直じゃないんだから。」ふいに耳元で誰かの声が聴こえた。

|| || ||

ある日、兄貴に彼女ができた。

キスをしている。淫らなキスを。女の子とバスケット部の部室で。気持ち悪い。

麻薬の取引現場を目撃し、捉えられてしまった役立たずのスパイ。女の子のオニシグロウにすらなれなかった壊れたマリオネット。

強奪犯はバスケット部のマネージャー。2年の女子。名前は知らないし、知りたくもない。おっぱいが……大きい。私にはないもの。お兄ちゃんが本当に欲しかったもの。

私が欲しくて欲しくて欲しくて、どうしても手に入れられなかったものを、この女は手に入れた。……悔しい。

「お兄ちゃんの……馬鹿。」ふいに、涙が零れ落ちそうになる。

せいっぱいの虚勢を張って、ギロリとアホ面下げた泥棒猫を睨みつける。

私 今、可愛い顔してないんだろうな。鬼のような形相。きつとそ
うだ。どうしよう……お兄ちゃんに嫌われちゃう。

「あたたなんかあたたなんかあたたなんかあたたなんかああ！」

「ちよ、違う！優愛 俺の話を聞・・」なんで、その女を庇うの？
あにいひは私の味方じゃなかったの？

私を見て？私を見て？私を見て？ あなたが私を視てくれないなら、
私が貴方の一番になれないのなら。

私は貴方を 拒絶 します。

「だから違うんだって！」

五月蠅いMEYOU五月蠅い五月蠅い！

言い訳

なんか

聴きたくない。

私は

貴方を

《拒絶》する。

「あにいななんかあにいななんかあにいななんかあああ！あああああああああああ」 取り乱すな。かつこ悪い。

「死んじゃえつ馬鹿兄貴！」 逃げるように、追いつめるように。全力でその場をエスケープする。涙の雫のなかに一握いちあくの砂を置いてけぼりにしながら。

自宅2階の私のベッドルーム。

「どうしよう。なんであんなこと言っちゃったんだろう……私。」

鬱だ……京都に行きたい。

「完全にあにいに嫌われちゃった。どうしよう。」

リカバーしなきゃ。でもどうやって……どうして……どうして……どうして……どうして……」

アンインストール

「もう……どうでもいいや。」

わんこ

女子高生の仮面を無造作にかなぐり捨て、妹のラベルをまた貼り直せるようにと、そつと優しく剥がしつつ。手馴れた動作で、私はブレザーに手をかける。カーディガンを脱ぎ、ブラウスをはだけ。ブラのホックを外す。スカートをストックと落とし。パンティをずらす。産まれたままの姿になる。胎児の私。

真っ黒な赤ちゃん。欠落した右腕。

そして

愛用のカッターナイフを私の下腹部。母なる子宮のさらに下。女の子のいちばん大事な部分にステンレスの刃を押し付ける。ぐいっと。

力は込めすぎず。悪魔の所業に、静かに愉悦と悲哀を込めながら、ギリギリの境界線を愉しむ。

私の中に異物が這入^{はい}ってくる感覚。誘惑の蛇が、禁断の果実をまさぐる。ズブ……ヌブ。くちゅ…くちゅ・り。

カッターナイフの無機質なキラキラが私の腔内^{おなか}に挿入される。ステイメンは膨張し、じつとりと汗と血と愛液を滲ませる。襞^{ひだ}に冷たい刃がこすれていい感じ。

これが瀬咲 優愛15才の 最高の快樂^{クラックダウン}。

「ん……気持ちいい」

すうすうと魂が肉体から乖離^{かいり}するよつな錯覚。ふわああつと 世界がゆっくりと優しく閉じていくよつな既視感^{デシヤヴユ}。

私がまだアリスだった頃、お母さんに読んでもらった壊れた童話。

『ヘンゼルとグレーテル』のお菓子の家の魔女にスプーンでざつくりと眼球をくり貫かれるような歪んだペイン。

『ジャックと豆の木』に出てきた人食い鬼に素手で直接、脳をぐちゃぐちゃに掻き混ぜられているような狂ったエクスタシー。

もともと 世界 には私一人しかいなかったかのような、そもそも世界 なんて最初から存在しなかったかのような……
そんな、蟲惑的な幻想郷。

「 ああ、私には本当に 心臓 がない」

赤くて紅い真つ赤な石榴^{せきじゆ}。ぬるくなってしまったトマトジュース。

ドロリ濃厚ピーチ味。鮮血と潜血の誓い。

痛い。気持ちいい。私の心臓が脈を打つたびにドクドクと。ビクビクと。ダラダラと。

だらしなく開かれた傷口から、血に混じって愛液が零れ落ちる。痛い。気持ちいい。気持ち悪い。

「っん……っあ」 これは彼女の悲鳴？いや、喘ぎ声か……私の。気持ち悪い。

ああ、私 今生きてる。ダメ……ロマンティックが止まらない。
このままずっと、永遠に。もっと深く、もっと奥まで。抉って欲し

い。ココロとカラダと魂を。ずるずるのばらばらに。
ぐずぐずのどろどろのぶよぶよに。

私の全てを壊してほしい。壊して壊して壊して。犯して犯して犯して

「ん。ダメお兄ちゃ……もうイっちゃ……」

【兄まことが、妹ゆあの部屋の扉を蹴破る】

「ばかやろおお！何やってんだあああああ」 ガフの扉が開かれる。

兄貴の分厚い掌てのひら。秒速3メートルの張り手が飛んてくる。私のかわいいほつぺたに。いや、位置が微妙にずれてる。30°斜め右。鼻に……鼻。鼻あ！？ ちよ、当たるw 逃げる。逃げ。回避……無r

《ばちーっ》 炸裂。衝撃が脳にまで伝わる。そして、ふつとぶ。重力と常識と男女平等の精神を無視して。

私ってこんなに軽かったっけ？ あ、後ろ……本棚……ダメ・ぶつか

《がしゃーっ》 ……。(返事がない……ただの屍のようだ)

「は、はにふんほよ……！」鼻を抑えながら、フラフラとギリギリの距離を保ちながら、立ち上がる。

ダメージは深刻。被害は甚大。ダメだ、ろれつが回らない。…これまでか。お父さんお母さんごめんなさい。

「…殴られた、あにいに。馬鹿のくせに。私よりずっと勉強できないくせに。」刹那、驚愕。そして憤慨。

「この分からず屋！」ぺちん。兄貴が私のほおをやさしくタップする。加減された、この私が？この上ない屈辱。

「なんで二度も打つ^ぶのよ、バカ兄貴！お父さんにだって殴られたことないのに……」「すまん！」こんな場面でも、直球。100マイルのストレート。

「はっきり言う。バスケット部のマネージャーとは何もやましいことはない、髪についたゴミを取ってもらったただけだ。」

《世界の真実》が語られる。大切な貴方の濡れた唇から。信じるor信じない

「そうなの？」「そうだ。俺が今まで優愛に嘘ついたことあったか？」「うん」 全裸で即答。

「……………」 再びサイレントタイム。

ポタ。あ、鼻血が出てる。血だ。赤くて痛い。でも、ぜんぜん気持ちよくない。

「あ……うつ」「会う？」 兄貴の間抜け面が、私のATフィールドを容赦なく中和する。お兄ちゃんの顔がどんどん迫る。あ、鼻毛がちよつと飛び出してる。

「うわああああん。お兄ちゃんのばかばかばか！
なんでお鼻たたくのお、私の大事な！ 痛い痛いいたああああい。

あーん、おかあさーん！お兄ちゃんがいじめたー」 爆発。セカンドインパクト。裸の赤ちゃんが泣きじゃくる。

「わかった、わかったからもう泣くな優愛。ほれ、ハンカチ。」
お兄ちゃんと妹の歪いびつでまっすぐな人間関係。

「うん……ひぐつえぐつ。バカ……お兄ちゃんなんか、お兄ちゃんなんかあ」 どこかで誰かが泣いている。これが……【私】？

「俺なんか？」 行け。そこだ。

『大好き』 くつついた二個の 心臓 がドキリと跳ね上がる。

一瞬の隙をついて、懐ふところに挟り込む。必殺のクロスカウンター。決着をつける。

敵が油断してる今この瞬間に。

「私、瀬咲優愛は、世界でいちばんお兄ちゃんを愛しています」

挟り込むように打つべし。打つべし打つべし。一気に畳み掛ける。

「……んちゅ」

キスをした。お兄ちゃんの唇に。軽く触れ合うだけのフレンチキス。でも……

「な、なんだよ。とつぜん」 固まる童貞。

戸惑う兄貴。青いね、瀬咲 真実 17才。ふふ、勝った。やっぱり私が正……

『俺から告白しようと思ったのに。』

カンカンカン！ ノックアウト。試合終了を告げるくそつたれなゴングが場内に響き渡る。瀬咲 優愛ゆあの負け。瀬咲 真実まことの勝ち。完全敗北。

どうやら、兄貴は真性の阿呆だったようだ。

今日は……大丈夫な日か。よし、まだやれる。

「さて、第2ラウンドと行くつか、童貞くん」
I won't
you is the WORLD END .

(後書き)

「お兄ちゃんの、ちっちゃいね。」 優しい歌を歌いましょう。

ばいばい。

さようなら。

おやすみなさい。

ありがとう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5815f/>

腐官能小説『優しい歌が歌えない-愛と世界と真実と-』

2010年12月25日02時24分発行